



発達支援の現場から

十人十色の

子どもたち

鈴木正樹 著

推薦の言葉

鈴木さんは、どんな子どもにも素晴らしい潜在的な能力があるということ、を、まっすぐに信じておられます。

そして、子どもと根気よくつきあい、良き聞き手となり、しっかりと関わることにより、対人関係が苦手だったり、コミュニケーションが苦手だったり、自信を失った沢山の子どもたちの、セルフエスティーム（自己肯定感）を高めることに、見事に成功されて来ました。

支援を必要としている子どもは、みんな「困った子」ではなく、「困っている子」なのです。この本を読むと、子どもを信じて寄り添うことの大切さに気づかされます。ぜひこの一冊をお薦めします。

竹田 契一

一般財団法人特別支援教育士資格認定協会理事長
大阪教育大学名誉教授

大阪医科大学LDセンター顧問

商社勤務を経て教育機関に転職、

不登校や学業不振の背景に

しばしば発達障がいや学習障がいがあることを知り、

そこに特化した学習塾をみずから起業した著者が、

一〇年にわたる奮闘の中で得た、

個性豊かな子どもたちとの出会いを描く、

珠玉の一八のものがたり。

発達支援の現場から

十人十色の
子どもたち

鈴木正樹 著

目次

プロローグ 006

第1話 学校に行きたいのに行けなかったAくん 015

第2話 イライラ感が強かったBくん 037

第3話 進学校から通信制高校に転入したCくん 047

第4話 集中することが苦手だったDくん 063

第5話 お母さんとの言い争いが絶えなかったEさん 077

第6話 気持ちを伝えることで夢に一步近づいたFさん 105

第7話 知的障がいのある弟を持つGくん 119

第8話	校門をくぐることができないHくん	129
第9話	思ったことをすぐに口に出してしまうIさん	139
第10話	書くことがトラウマになっていたJくん	149
第11話	自分に合った勉強方法を見つけたKさん	167
第12話	勉強する時に気が散ってしまうLくん	175
第13話	自分の間違いや失敗が許せないMくん	183
第14話	文字を書くことが苦手なNくん	197
第15話	家族以外の人とのやりとりが苦手なOさん	207
第16話	いつもにこにこしているPさん	217
第17話	頑張りすぎてしんどくなってしまったQさん	227
第18話	コミュニケーションが苦手だったRくん	237
エピソード		252

これは、私が、アパレル系商社からとある教育機関に転職し、教室管理や講師育成の仕事に加えて、保護者や子どもたちからの相談に応じる業務に携わっていた頃の話です。

ある日、中学一年生の男子生徒のお母さんから、「息子は、小学校三年で担任が変わった時から時々学校を休むようになり、小学五年生になるとまったく行くことができなくなりました。本当にどうすればよいのかわからず悩んでいます」という相談がありました。

すでに学校や相談機関には行かれたものの、「もう少し待っていれば、自然に行くようになりますよ」と言われただけ。さらに、ある塾に相談に行ったら、先生が本人を「そんなに学校が嫌いなのか？ 学校に行かない奴は怠け者だぞ！」と厳しく叱りつけ、それ以来、人に会うことが怖くなり、部屋に閉じこもるようになってしまったとのことでした。

それで、困り果てた挙句に、私が勤めていた教育機関に来られたというのです。

ところが、私が家庭を訪問してもそこに本人の姿はなく、お母さんが呼んでも、二階から「うるさい!」「ほっといてくれ!」という声が響きわたるばかり。

そこで、お母さんに了解をいただき二階の彼の部屋の前まで行きましたが、鍵がかけられた扉の向こうからは、「はやく帰れ!」という尖った声^{とが}が返って来るだけでした。やむなく私は、ドア越しに「突然来たのは嫌だったよね。ごめん。一番辛いのは君自身だもんな。ただ、何か力になれることがあるといいなと思ってる。今日はもう帰るけど、もしちょっとでも話をしたいと思ったら、電話でもメールでもいいから連絡して欲しいと、僕は思っているよ」と告げ、電話番号とメールアドレスを書いたメモを、ドアの隙間^{すきま}に入れました。

そして、突然に訪れたことを詫びつつ階段を降りると、「オレは学校が嫌いで行かないんじゃない! 行きたいけど行けないんだ!」という絶叫^{とどろ}があたりに轟いたのでした。

*

その教育機関の主なサービスが家庭教師派遣だったこともあり、私は、当時、家庭

訪問をたくさんしていました。新規の相談だけで、おそらく年間三〇〇件くらいは訪問していたと思います。

それまでも、不登校の子と出会うことはありませんでした。というのも、お客様の中には、実情として、不登校のお子さんが相当数おられたからです。

けれども、私も、当時は、不登校に対して、正直なところ「さぼってるんやな」「甘えてるんやな」というように思っていました。

それゆえ、相談を受けても、やる気を促す^{うなが}だけというか、「頑張ろうや」とか「高校楽しいぜ」とか「みんなに会えるやん」とか「友だち多い方がええやん」といったよ
うな語りかけをしていたのです。

*

しかし、その後、いろいろなお子さんと出会う中で、実は、不登校になっている本人が、学校に行きたいと思っている。本当は学校のことを好きだし、勉強だって、わからないけど、嫌いじゃない。友だち関係も、上手く行かないけど、友だちと遊びたいし、話したい。でも、実際に行く^とと失敗するし、嫌な思いをするから、あえて行か

ない。という、これはもう立派な自己防衛だと思ふのですが、そういう苦渋くじゅうの選択をした子どもたちは、想像以上に、本当にしんどい思いを抱かかえているのだということがわかったのです。

*

さらに、私は、こういった経験を積むことと並行して、不登校やひきこもりに関連する勉強会に行ったりする中で、「発達障がい¹」という概念がいねんと出会いました。そして、不登校やひきこもりという事態が、しばしば、発達障がいの二次的障がいとして生じているということを知ったのでした。

これははっきりと勉強しないといけないと思ひました。そこで、専門家の先生方からいろいろとお話をうかがってみると、私がそれまでに関わってきた子どもたちのうちの相当数たうたうすうが、いわゆる発達障がいとか学習障がい2に該当するのかなと。そのように考えると、とても腑ふに落ちるものがあつたのです。

そして、その子の認知特性や、その子がどういうプロセスを経て不登校やひきこもりになったのかということ踏まえて、本人に介入する部分と、保護者に介入する部

1
発達障がい

一般に、比較的低年齢において発達の過程で現れ始める、行動やコミュニケーション、社会適応の問題を主とする障がいを、総称して発達障がいと呼ぶ。

2
学習障がい

全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する、または推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を、学習障がいと呼ぶ。

分と、その両面で考えて行かないと、状況は変わらないのではないか。私はそのように確信するに至り、具体的には、子どもの家庭環境と学校環境の両方に、なんらかの変化を加えてあげられるような機関や場所が必要とされているのではないか、と考えるようになったのです。

*

このような経緯があり、私は、「できることからはじめよう」というスローガンを掲げて、単なる学習塾としてだけではなく、子どもたちの自己肯定感を高めて行くことを目標としたサポート機関として、アットスクールを立ち上げました。

アットスクールでは、発達障がいや学習障がいのお子さんに限らず、常時、たくさん子どもたちを迎えて、スタッフや講師とともに、そして、教育・医療・福祉の各方面の機関や専門家の方々との連携のもとに、教育支援のごく一部を担うという形ではありますが、子どもたちの「やる気・根気・元気」の芽を育てて行くことを目標として、日々活動しています。

おかげさまで、これまでの一〇年間で、じつに延べ四〇〇〇人余りの子どもたちや

親御さんたちと出会わせていただくことができました。

*

子どもたちが十人いれば十人それぞれに顔や名前が違うように、性格にも能力にも違いがあります。十人十色、一人ひとりが得意なことを活かして、苦手なことを克服して行く中でこそ、子どもたちは自信をつけて行くことができます。

*

子どもの頃は成績優秀だったのに、大人になってから日々悩み苦しんでいる人を見かけることがあります。

発達障がいを持つ場合であっても、勉強がよくできて、難関校へ進学し、その後も一流企業に就職して、そのまま順調に行けば良いのですが、しかし、朝起きるのが苦手や会社に遅刻したり、取引先との待ち合わせでも遅刻したり、あるいは、仕事の手順がわからない時も自分の判断で勝手に進めてしまったりして、その結果、ミスや失

敗をして周囲に迷惑をかけ、会社では次第に「信頼できない奴」と評価されるようになる。そして、自己評価も低くなり、職場で孤立して、うつ状態やひきこもりに陥ってしまう。そういったこともよくあります。

その一方で、小学生や中学生の時は勉強が苦手で、成績も悪く、進学校や大手企業には入ることができなくても、大人になって、社会人として活躍したり、幸せになっている人もたくさんいます。

*

それでは、子どもたちが社会の中で自立して行くためには、幸せになるためには、学校や家庭において、どのような力を身につけて行くことが大切なのでしょうか。

より多くの知識を身につけ、成績をアップさせて行くことは、もちろん大切なことだと思います。

ですが、それ以上にもっと大切なのは、ささやかなことであれ、目標に向かって「根気良く頑張る気持ち」を持つことではないかと、私は思います。

どんな成績の子でも、読み書きやコミュニケーションに苦しさがある子でも、目標に

向かって、できることから、一歩一歩、コツコツと、努力することが尊とうといのです。この姿勢こそが、将来の自立、「生きる力」につながるのです。

そして、われわれ大人は、子どもたちの「頑張る気持ち」を支えるために、彼ら彼女らの、どんな小さな努力も見逃さず、認め、評価してあげなければなりません。

発達支援の現場においては、一人ひとりの子どもが、試行錯誤をしながらも、目標を達成する経験を通して、自己肯定感を向上させて行くこと、そして、周りにいる大人たちが、そのことに寄り添うことが、何より大切なことだと私は思います。

*

この本で私は、アットスクールを創立してから出会ったさまざまな子どもたちのことを、プライベートシーなどに配慮しつつ、また本質が伝わりやすいように、フィクションとして書いてみようと思います。

以下のものがありますが、少しでもみなさんのお役に立つようであれば、それ以上に幸せなことはありません。

第一話

学校に行きたいのに
行けなかった
Aくん



私がAくんと出会ったのは、アットスクールを創業して間もない頃、ある研修会でお世話になった先生からの紹介がきっかけでした。

当時、小学五年生だった彼は、小二から小四まで不登校状態にあり、小五の二学期から別室³登校をするようになったものの、しばらくするうちに、別室にも通うことができなくなっていました。

*

初めて会った時のこと。私から自己紹介すると、彼は、私と目を合わせることもなく、うつむいたまま、「僕は、しょっちゅう頭痛が起るし、やる気が起きないことがあるので、うつかも知れません」「死ぬんなら、やっぱり首つり自殺かなあ」と、つぶやきました。

*

これには、私も大きな衝撃を受けました。それで、返す言葉もすぐには見つからな

3
別室登校

児童・生徒が教室ではなく保健室などに通うことを、保健室登校ないしは別室登校と呼ぶ。

かったのですが、「君が自殺することは誰も望んでいないから。もう少し違う方法がなか、僕と一緒に考えて行きませんか？」と提案しました。すると彼は、「どうせ死ぬんやし、まあええけど」と答えてくれました。

そして、次のようなやりとりをしました。

「じゃあ、これから毎週来るけど、何曜日がいい？」

「べつにない」

「じゃあ、水曜日の午後二時から三時までの一時間、空けておいてくれる？」

「寝てるかも知れんけど、まあいいよ」

*

それから四カ月間、私は毎週水曜日に、彼の家を訪問しました。

訪問する時は必ずトランプとオセロを持って行き、それで一緒に遊んだり、彼がいつもやっているゲームをしながら、テレビ番組やDVDについて話をしたりしました。

時には、私が行っても寝ていることもありましたが、そんな時は本人を起こさずに、お母さんと話をして帰りました。

そうこうするうちに、Aくんは、少しずつであれ、私のことを信頼してくれるようになり、帰りがけに玄関まで来て、「来週は大富豪をやろう！」などと言ってくれるようになりました。

*

私自身も、少しずつでも外の世界に興味を持つようになってくれればと考えて、職場の話や出張先での出来事などを、Aくんに話すようにしました。

*

しばらくすると、Aくんは、私が失敗の話をした時に、「お客さん相手の仕事やねんから、ちゃんとせなあかんやん！」とか「電車、間違えるとパニックになるな。でも、なんで調べて行かんかったん？」などと、ダメ出ししたりアドバイスしてくれたりするようになりました。

*

こうして、Aくんとこのやりとりに変化が生じてきたので、私は、彼の状況がさらに変わるようなきっかけを与えてみることにしました。

「じゃあ、僕からひとつお願いをするけど、いい？」

「ええで。何なん？」

「今までは、君が僕の話聞いてくれたので、これからは、君から僕に、面白かったことや楽しかったこと、あるいは、しんどかったことを話してくれないかな？」

「……。ずっと家におるから、特にないねん。いつも同じやし」

「そうやな。情報とかネタがないと、しゃべれへんな」

「……」

「じゃあ、情報とかネタを集めるには、どうしたらいいと思う？」

「うん。外に出る。学校に行くとか、友だちと遊ぶとか」

「そうやな」

「うん」

「そしたら、情報とかネタを集めに、学校に行こうか？」

このような会話があり、私はこのことを、お母さんとお父さんに報告しました。そして、校長先生や担任の先生とも相談した上で、その翌月から、Aくんは学校に行くことになりました。

*

最初は、少しずつ無理をしないように、算数だけ別室で授業を受けることにしてもうりました。そして、他にも興味が持てそうな授業があれば、その時はクラスに行く、ということになりました。

*

おそらく、緊張と不安もあったのでしょう。初めの一週間は、かなり疲れている様

子のAくんでしたが、学校に行くことによつて、当初の目論見通りに情報やネタが得られて、私との会話も弾むようになりました。

「今日は、学校の先生とオセロをしたわ。最初は負けたけど、あとは全部俺が勝つたで」

「そうなん。何回やったん？」

「うゝん。たぶん五回くらい」

「じゃあ、四勝一敗やな。巨人と同じやね」

「俺、巨人嫌いやし」

「じゃあ、どこのファンなん？」

「そら、阪神やろ！」

*

それからというもの、Aくんは、学校でお好み焼きを作った話や、校長室の金魚の餌やりをすることになった話など、たくさんのことを私に話してくれるようになりました。

こうして、生活リズムも安定し、学年も小六に上がり、学校生活も順調に行き始めました。そして、そのことを、ご両親も先生方も、さらに私も、とても喜んでいました。

*

ところが、ゴールデンウィーク明け頃から、Aくんは、学校に行っても表情が暗かったり、学校を突然休んだりするようになりました。

*

本人にその理由を尋ねると、「わからない授業を聞いているのが辛い」「特に理由がないのに時々涙が出る」「知らない人が笑っていると、自分のことを笑っているように感じる」「首がこったり、ずっと身体がだるい感じや、頭が重い感じがあたりす」とのこと。

私は、まず、無理をさせてはいけないと思いました。けれども、少しずつではあれ、外に出ることや人と話すことへの抵抗が薄れてきていたということもあったので、ご両親や担任の先生と相談した上で、さしあたっては、学校に行けない時にも彼の居場所となるよう、地域の支援センターを紹介し、学校に行けない時は支援センターに行くことにしてはどうか、という提案をしてみました。

*

さらに、ご両親がずっと気にされていながら、そのままになっていた、医療機関の受診という事柄についても、話をすることにしました。

*

それまでにも、彼がまだ小三の頃に、市の教育相談の担当者から「一度、病院に

4
支援センター

「発達障害者支援法」「発達障害者支援センター運営事業実施要綱」に基づいて全国に設置された、発達障がい児(者)への支援を総合的に行うことを目的とした専門的機関。本書巻末参照。

行ってみたらどうですか」と勧められたこと^{す+}があつたそうですが、その時は、「良くなるのならば」と思つたものの、「もしも障^{しょう}があるという診断を受けたら、そのことを受け容れられるだろうか」と悩んでしまい、結局、思い切ることができなかつたとのこと。

そこで私は「病院に行くことについて悩まれるお気持ちはよくわかりますが、障^{しょう}があるかどうかということよりも、今の本人のしんどさが少しでも楽になる方法が見つかるとも思えないですし。とにかく、一番しんどい思いをしているのは、彼自身なんですから」と切り出し、「病院にかかることによつて、良くなる方法が見つかるとも思えないということを引きちんと伝えて、その上で、行つてみるか、それとも今は行かないのか、どうしたいかを、本人に聞いてみる、というのはいかがでしょうか?」という提案をしました。

*

数日後、本人に、私とお母さんから、「理由がないのに涙が出たり身体がだるかつたりするというのは、何か原因があるのかもしれない。その原因がわかれば今よりも楽

になる可能性もあるから、一度病院に行ってみないか？」と、診察を受けることを勧めてみました。

本人は、「せっかく学校に行けて楽しかったのに、また行けなくなったのは嫌やから」と、病院に行くことを承諾してくれました。

*

半月後、Aくんは医療機関を受診しました。そして、アスペルガー症候群と学習障がい⁵の診断を受けました。

医師からアスペルガー症候群の診断とその特性について説明を受けたご両親は、かなり戸惑われて、特にお母さんは、診察が終わった後も、しばらく診察室を出ることができませんでした。

*

ご両親との話が終わった後は、本人が診察室に呼ばれ、医師から本人に、Aくんは

5 アスペルガー症候群
知的障がいを伴わないものの、興味・コミュニケーションについて特異性が認められる広汎性発達障がい⁶の一種。

学校に行ったり人と話したりすると、いろんなことを考えて不安になったりすることもあるようだけれども、それは病気ではなく、Aくんの個性だから心配しなくてもいい、ということ。さらに、夜眠れなかったり気分が落ち込んだりすることを少しづつ減らしていくために、今日から薬を飲んでもらう、ということの説明がなされました。診察室から出てきたAくんは、少しほっとした表情を見せて、「お医者さんはちよつと怖かったけど。しんどくなくなるって言ったから、お薬飲んでみる」と言いました。

*

それから薬物治療が始まりました。二種類の薬を飲み始めてから、Aくんの食欲は少し落ちたものの、不安はかなり減ったようで、夜もぐっすり眠れるようになり、情緒も安定するようになり、表情に笑顔が戻ってきました。

*

その後もAくんは定期的に通院し、薬の効果が現れてきたこともあり、今後のサ

ポートの方向性を相談する場として、保護者、医師、学校、支援センターと、そこに私⁶が加わって、ケース会議が行われることになりました。

そこでは、

- ・（保護者からは）ふだんの家庭での様子について
- ・（医師からは）薬物の調整や経過観察の結果について
- ・（学校からは）登校した時の対応や別室利用について
- ・（支援センターからは）センターでの様子について
- ・（私からは）本人と話をした時の様子や本人の思いについて

といったことが報告され、みなで情報を共有し、彼をサポートするための有効な方法について、話し合いが行われました。

*

Aくんは、週に一回は支援センターに行き、そこで相談員の方と会話したり、ゲー

6
ケース会議

支援のためにその子を囲む関係者・機関が一堂に会して協議する会議のこと。

ふをしたりといったこともできるようになってきました。そして、本人の希望もあつて、私との相談も再開することとなりました。

*

二カ月ぶりに訪問した時、彼は、とても嬉しそうな表情で私を迎えてくれました。そして、

「ここん、暇ひまやったわ」

「そうか。で、調子はどう？」

「前に比べたら、調子いいで。頭あたまが痛くなるのも減ったし」

「それは、良かったやん」

と、以前のように楽しく会話を始めてくれたのですが、その後さらに、彼はこんなことを話してくれたのです。

「でもなあ、あかんねん」

「何が、あかんの？」

「最近頭を使ってへんから、計算できんようになってしまったわ」

「計算って、どんな計算？」

「九九がわからんようになった」

「そうか」

「寝る前に一の段から言ってみるんやけど。五の段までは大丈夫なんやけど。六とか七の段になると途中でわからなくなるねん」

「そうか。九九な。六とか七の段、結構難しいもんな」

「これから中学行ったら困るやろ？ だから、今のうちに何とかせなあかんねん」

*

それまで私は、心のどこかで、彼はやっぱり学校や勉強が嫌いなんじゃないかと、そう思っていました。

しかしこの会話をした時、私は確信しました。Aくんはその胸の内ですつと、学校や勉強のことを気にしていたのです。

本当は学校に行きたい。だけど、行つたら行つたでしんどい思いをするし、かといって、どうしたら良いのかわからない。

彼の中にはそんな葛藤^{かつとう}がいつもあって、そのせいでずっと学校に行けなかった、というのが事実だったのです。

*

翌月のケース会議の場で、私は、Aくんとのお話を紹介して、彼の学校や勉強に対する思いや気持ちについて、保護者や関係者の方々に報告し、勉強への苦手意識の改善^{はか}を図り、今後に向けての見通しと自信を持たせるために、家庭教師をつけることを提案しました。

そして、家には家庭教師の先生に来てもらい、支援センターでは相談員の先生と一緒に国語と算数の勉強をする、ということになりました。

特に、算数に対する苦手意識が強かったので、指導の際には、四則計算の手順書や、九九カード、電卓なども利用して、少しずつ計算問題の自信をつけてもらえるよう、私からていねいにお願ひしました。

*

先生方の工夫と、もちろん本人の努力の甲斐もあつて、二学期が終わる頃には、Aくんは、小六で求められるレベルの問題はほぼできるようになり、私との会話の中でも「俺、大分、計算できるようになってきたわ」「小学校に入った時に算数がまったくわからなかったけど、結構おもしろいなあ」などと言うようになり、勉強に対する自信もついてきたようでした。

*

冬の初めの頃のこと。お母さんから「Aが年明けから学校に行きたいと言っているのですが」という電話をいただきました。算数に対する苦手意識も減り、自信がついてきたことが、Aくんの心を動かしているようでした。

私たちは、Aくんがしばらく学校から遠ざかっていたことを考慮して、さしあたり年内は、まず午前中は支援センターに行き、その後、学校に寄ってプリントをもらって帰る。そうすることでAくんの学校への抵抗感を減らすという作戦を考えました。

*

時々雪も降る寒い冬でしたが、支援センターから学校へというパターンは、やはり本人にとってもストレスが少なかつたようで、必ず学校に寄り、時には校長室にも立ち寄って金魚の餌やりをして帰って来ることもありました。

冬休み中は、体調管理と生活リズムに気をつけるとともに、三学期に習う単元の予習を行い、年明けからの授業にスムーズに入れるよう入念に準備をしました。

*

そして、期待と不安の中、三学期がスタートしましたが、本人は、緊張する様子もなく、とても穏やかな表情で教室に入ることができました。

初日の三時間目が終わった休み時間のこと。Aくんが廊下にいたお母さんと私のところに来て来ました。そして「久しぶりの授業やけど、よくわかるし、学校ってやっぱり、いいなあ」と言いました。お母さんの目には、うっすらと涙が光っていました。

三学期が始まって一カ月が経った頃には、友だちの輪にも上手くとけこみ、休み時間には、ドッチボールやけん玉などで楽しく遊び、授業中には、苦手だった算数の授業で発表する姿も見られるようになりました。

*

そして、二月も終わりが近づいた頃、学校では卒業に向けての準備が始まりました。卒業アルバムのクラス写真の撮影も無事終わり、仲間に交じっての卒業文集作りなどの活動も、とても楽しそうでした。

*

「俺、本当に卒業するんやな」

「そうやで。楽しみやな」

「楽しみやし、信じられへんわ」

「そやな」

「卒業文集でな、将来の夢を書かなあかんかってん」

「そうか。なんて書いたん？」

「友だちは、サッカー選手とかお医者さんとか書いてはったけど。俺はな、学校の先生って書いたんやで！」

「そうか。いい夢やな。なんで、学校の先生になりたいと思ったん？」

「それはな、学校に行けへんかった時、正直、なんで自分だけ行けへんのやろうって、ずっと悩んでたんや。でも、俺は、五年生になってから、鈴木先生やたくさんの先生と出会えたから卒業できるけど、俺みたいに悩んでいる子もいると思うねん。そやから、そんな子に早く気づいてあげられる先生になりたいねん」

「そうか。いい夢やな。Aくんなら絶対にいい先生になれると思うよ。その夢を実現するまで、ずっと応援するから。まかしとき！」

*

そして、卒業式の全体練習が始まりました。けれども、Aくんは他の子どもたちと一緒に列に並んで、前に出て卒業証書をもらうということが上手にできるかどうか不安で、練習に参加することができませんでした。

「卒業式には出たい？」

「できるのなら出たい」

「そうか」

「でも……」

「じゃあ、今から一緒に練習しに行こう！」

私はAくんと一緒に学校に行き、担任の先生にもご協力いただいて、体育館で卒業式の練習をしました。

何度か練習しているうちに、最初はぎこちなかったAくんの動きから硬さがとれて行きました。私はAくんに「卒業式の日には僕も見に来るからね。Aくんの卒業式の姿を見たいからね。だけど、もしも当日しんどかったら、校長室で卒業式をしてもらおうな」と声をかけました。

*

卒業式の前日のこと。本人から「この前練習したので明日は大丈夫です。卒業式、見に来てください」という電話をもらいました。

そして、卒業式の当日は、とても緊張した表情でしたが、Aくんは、自分の名前が呼ばれた時、大きな声で「はい」と返事をする事ができ、練習の時以上にスムーズに、堂々と、卒業証書をもらうことができたのでした。

私はつねづね、発達障がいについて、支援しなくてはならないものというのではなく、そこに大きな可能性を感じています。

発達障がいの人たちがいるからこそ人類は進化して行く、なんていうと大袈裟おおげさかもしれないけれども、昔の偉人と呼ばれるような、たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチとか、エジソンとか、現代で言えばビル・ゲイツとか、そういう人たちがいたからこそ人類は発展したのだと、私は思います。彼らは一歩先を行っているのです。彼らは、私たちが気がつかないことを教えてくれます。

アットスクールを運営する毎日の中にも、子どもたちによって、気づかされること、もたらされる発見が、日々、たくさんあります。

本書に書かせていただいたことは、ごく一部のケースにすぎませんが、発達障がい児への支援や子育てのヒントとなるようであれば、これほど嬉しいことはありません。

また、本書には、いわゆる発達障がいや学習障がいと診断されない子どもたちにも登場してもらいました。大人の世界でも、じつにさまざまな人がいて、いろいろなことが

起こります。そこでも、この本に書かれていることが、なにかの役に立てばと思います。

もしも、みなさんのまわりに、対人関係やコミュニケーションが苦手な人がいたら、「変わった奴だ」と思ったり「融通が効かない人だ」などと決めつけたりせずに、話しかけてみてください。そして、その人が困っているようであれば悩みを聞いてあげてください。

そうした関わりが、その人に自信を与えるだけでなく、あなた自身にとっても、大切なものは何かということを感じさせてくれる、きっかけになるかもしれません。

十人十色^{じゅうにんといろ}。一人ひとりとはみな違います。だからこそ、互いに理解し合い助け合う世の中は楽しいということ。そのことを、どうか忘れないでください。

最後に、この本が出来上がるまでに、たくさんの方々からお力添えをいただきました。お名前を挙げることは控えていただきますが、みなさまに厚く御礼申し上げますと思います。ありがとうございます。

二〇一五年初夏

株式会社アットスクール 代表取締役

鈴木正樹

著者紹介

鈴木正樹（すずき・まさき）

一九六七年静岡県生まれ。大学卒業後、高校教師、アパレル系商社、教育機関勤務を経て、二〇〇五年、発達障がい児および不登校の子どもたちの支援を目的とし、株式会社アットスクールを設立。以来、教育や発達相談に携わりながら、各地域の民間リソースを拡げていくことを目的に、全国での講演やサポーター養成研修、フランチャイズ事業を行っている。また、現在は、一般社団法人発達サポートセンター・ピアすまいる代表理事、京都女子大学共同研究者として、発達障がい児およびその家族に対し、発達障がいのある人の自立支援や啓発活動を行うことにより、地域と社会の福祉の増進を図り、広く公益に貢献することを目的として活動している。二〇一九年には、明蓬館高校との提携により、発達障害の生徒に特化した通信制高校、アットスクール高等学院を設立、開校。

連絡先

株式会社アットスクール

〒五二五-〇〇三二 滋賀県草津市大路一-一八-二八 藤井ビル2F

電話 〇七七-五六五-七三三七

Website <http://www.at-school.jp/>

E-mail kosodate@at-school.jp

じゅうにんといろ
十人十色の子どもたち

—— 発達支援の現場から

二〇一五年六月二十八日 第一刷発行

二〇一九年七月二〇日 オンデマンド版発行

著者 鈴木正樹

発行者 大隅直人

発行所 さいはつ社

Website <http://saihatesha.com/>

E-mail info@saihatesha.com

校正 正岡加代子

デザイン 北尾崇 (HON DESIGN)

イラスト 会退由希恵 (HON DESIGN)

Copyright © 2015 by Masaki Suzuki

ISBN 978-4-9909566-3-9